

第Ⅴ章 まとめ

第1節 万之瀬川下流域の遺跡変遷と加治屋遺跡の位置づけ

近年、万之瀬川下流域では各地で発掘調査が行われ、その内容が明らかになりつつある。その中には椿ノ原遺跡や持鉢松遺跡などのように全国的に注目されている遺跡もあるが、全体的にその移り変わりがたどられることはあまりない。ここではその変遷を概述し、その中での加治屋遺跡の性格を考えてみる。

万之瀬川は川辺平野をゆったり流れ下りてくると、幅 200 m ほどのくびれた部分にあたる。川幅も 10 m ほどと狭くなり、底にはごつごつした安山岩礫が露頭している。そこから再び開け、やがて左側から流れてくる大谷川、さらには加世田川と合流する。この再び開けた部分の左岸にあるのが加治屋台地で、川との比高が約 10 m あり、対岸は山が迫っている。万之瀬川は加世田川と合流するとやや北側に蛇行し、台地端に沿って流れ、海岸近くの砂丘のあたる所で南へ曲がり、まっすぐ相星の河口へ向かっていた。ところが、この河口は享和 2 年（1802）の大洪水によって、砂丘をまっすぐ貫いて現在の河口へとその位置を変えたのである。

約 1 万 2 千年前の縄文時代草創期には左岸のシラス台地で全国的にみても早い時期の定住生活が営まれた。椿ノ原遺跡である。竪穴住居跡はみつからないが、集石・連穴土坑などの遺構や、草創期としては多量の土器、大きな石皿など安定した定住生活の痕跡を残している。さらに 9500 年ほど前の早期前半にも同じ椿ノ原遺跡で生活が行われたらしく多くの土器・石器が出土している。早期後半の遺跡は少ない。加治屋遺跡の今回の第 2 地点ではこの時期、中葉から後葉にかけて割と多くの土器が出土し、第 1 地点では土坑も見つかっている。

前期になると右岸の低地に生活跡がみられる。標高約 2 m の上水流遺跡である。ここではさらに中期の春日式土器の時期まで生活しているが、ここからさらに下流の芝原遺跡でも同時期の土器が多く出土している。早期には台地だけで生活しているが、前期後半になると低地にも進出しているのである。

後期には芝原遺跡に集落があったようで、指宿式土器の時期から市来式土器までの土器・石器が多く出土している。集石も多くみつかり、安定した生活跡を残している。芝原遺跡では市来式土器の時期で痕跡が途切れているが、そのあとに生活跡があるのが加治屋遺跡で、この遺跡では次の晩期前半の上加世田式土器の時期にピークを迎える。上加世田式土器期に上加世田遺跡では大きな土坑がみつかり、この中からは土偶・石棒などの祭祀用具、管玉・勾玉などの装飾品およびその未製品・加工具などがみつかり、この遺構では炉跡・骨片などもみつかり広い範囲での共同祭祀・加工場と思われる。最近では玉生産地とみなされており、その製品は岐阜・新潟あたりまで伝わっているといわれている。晩期には上水流・上ノ城などの遺跡でも多くの出土品がみられる。

弥生時代になると、さらに下流で万之瀬川に合流する堀川の下流域に広がる田布施平野に主体が移り、下原遺跡・高橋貝塚などで初期の稲作文化が栄える。万之瀬川流域では芝原遺跡で前期・中期と出ているが、量は少ない。中期には川辺平野の端にある寺山遺跡で二重環壕が存在する。田布施平野でも後期初めには松木藺遺跡で防御用と思われる大規模な溝状遺構が発見されており、両平

野とも稲作農耕の発達とともに集落の広がりのあったことが予想できる。同じ頃たいした遺跡のない万之瀬川下流域でも、後期の終り頃には芝原遺跡で多くの土器が出土し、集落の拡大がうかがえる。この遺跡では方格規矩鏡の破片と小形仿製鏡3面が出土しており、このあたりでも権力者が存在していたことを物語っている。

梶ノ原遺跡では竪穴住居3軒も発見されている。

芝原遺跡では古墳時代でも拠点となる大集落があったようで、少し上流の上水流遺跡とともに竪穴住居跡の発見こそ少ないが、多量の土器が出土している。古墳時代には加治屋遺跡でも土器が多く出土しており、上ノ城遺跡や中小路遺跡でも多く出土している。河口近くには箱式石棺をもつ古墳が存在している。

古代には薩摩国阿多郡に含まれているが、この地域には早くから仏教文化がはいったらしく各地で蔵骨器が出土している。白檜野・新山・杉元寺跡などがその遺跡で、加治屋遺跡でも焼骨は出ていないが、合せ口の土師甕が出土している。加治屋遺跡では竪穴住居と思われる遺構もある。平安時代になると中岳山麓に須恵器の窯跡群がつくられる。この積み出し地と思われる芝原・渡畑遺跡では多くの須恵器が出土し、渡畑遺跡では瓦も出土している。薩摩半島最大の窯で、薩摩国だけを対象とした生産でなく日向国などまで製品が伝わったといわれており、出土している瓦が薩摩国分寺跡のものとすれば、単なる窯というより国をあげての官窯的性格をもっていたものと思われる。このことは芝原遺跡で出土した石帯や多口瓶など一般村落では出てこないような出土品からもうかがうことができる。またこの下流にある万之瀬川底遺跡・高橋貝塚でも多くの須恵器が出土しており、同じような性格が考えられる。

中世になると、万之瀬川下流域が中国や中京地区、さらには南西諸島との交流地となるといわれており、近世にはさらに下流の唐人原地区が薩摩藩の交流の核となる。

こうしてみると加治屋遺跡はまず縄文時代草創期、さらには早期中頃から後半にかけてキャンプ地的な遺跡として生活が始まっており、後期初頭には今回調査の第2地点周辺で安定した生活が営まれたようである。そして後期の終り頃には生活の場をやや低い地に移し、芝原遺跡などの縄文時代後期中頃に次ぐ遺跡として拠点地となり、晩期初めには玉造りなどの拠点地となる上加世田遺跡に続く台地の遺跡として重要な位置を占める。そして弥生時代は空白となるものの古墳時代になると分村としての存在を占め、平安時代には阿多郡中心地の周辺部として生活の場さらには墓地の場として使われたようである。

ただ今回の調査でわかったように同じ加治屋遺跡といっても、同じ台地内で全く別の時代の居住地・墓地が他の地点に所在することがある。ということは、遺跡の一部での調査だけでは先史時代の人びとの動きはつかみ得ないということである。遺跡の評価をする時、この成果は重要であろう。

第2節 縄文時代草創期・早期の土器について

南九州における草創期の土器編年は雨宮瑞生や児玉健一郎らによって研究されている。当遺跡出土の隆帯文土器は1点だけだが、鹿児島市掃除山遺跡出土のものに類似している。雨宮は草創期を3期に分け、この土器をそのうちの2期（中葉）に位置付けている（雨宮：1997）。児玉は隆帯文土器を4期に分け、これを草創期中葉～後葉に位置付ける。そして、掃除山遺跡出土の土器は隆帯

文土器のⅢ期とし、後葉の前半としている。ただ、隆帯文土器の次にくる岩本式土器について、これを従来の草創期末から早期初頭に位置付けるのではなく、すべて草創期とする必要があるかもしれないとしている。そうすれば、もう少し古く位置付けられる（児玉：1999）。つまり、中葉のなかにはいる可能性を示唆している。当該期の土器は、近隣の榊ノ原遺跡とほぼ同時期、すなわち、草創期中葉から後葉前半にここでの居住があったことを示している。

早期の土器は3期に分けられている。

貝殻条痕文円筒形土器系統の桑ノ丸式土器、小型の山形文・楕円文などの付された押型文土器、さらには凹線と縄文が付される塞ノ神A式土器の3種である。桑ノ丸式土器も細かい平行線文となるものと、粗い平行線文のものがあり、時期差のあることが予測できる。押型文土器は小粒の押型文様・直口する器形などから早水台式土器と考えられる（八幡・賀川：1955）。当遺跡の塞ノ神A式土器は凹線に挟まれた縄文が口縁部から胴部にかけて施されており、河口貞徳の塞ノ神A式土器、新東晃一の鍋谷式土器にあたり、この様式ではもっとも新しい（河口：1972、新東：1988）。

第3節 縄文時代後期の土器について

南九州の縄文時代中期末から後期前半の土器には阿高式土器・南福寺式土器・出水式土器・岩崎下層式土器・岩崎上層式土器・指宿式土器といったような型式名が与えられており、その編年も試みられているが、中期と後期との区分、その編年とも明確でないのが現状である。

当遺跡においても層位的・分布域的に出土土器を分ける資料を得ることはできなかったが、大筋としては同じ形態・文様・調整をしており、同一型式、あるいは連続する型式である。当遺跡の土器は開きながら直口する胴部と、安定した平底から成り、口縁部分には幅広い文様帯がある。この部分を肥厚帯とするものもあり、口唇部に指頭やヘラによる押圧文の施されるものが多く、底部には木の葉などの圧痕が付き、白い粉が付着したものも多い。文様は大きく①押圧文＋凹線（凹線の間に2列ほどの押圧文がみられるもので、凹線は半円形状、くの字状、横線などがある。）②押圧文（指頭圧痕文やヘラ圧痕文があり、円形をしたもの・長方形をしたもの・長楕円形のものなどの種類がある。数列にわたって施され文様帯をなしている。）③横あるいは斜方向・矩形凹線（縦・横の凹線文を基本とするもので、これで矩形をなしたり、格子状の形を作り、その中に押圧文を施すものもある。）④無文（段などで文様帯を作っているが、この部分をヘラナデ、ヘラケズリのみで仕上げるものである。）の4種類に分けることができる。中期末から後期に変わる段階においては、文様帯が胴部から消失し、口縁部のみに集約される傾向がある。これが田中良之のいう阿高Ⅲ式土器の出現になるのであり（田中：1979）、南九州では岩崎下層式土器の時期にあたる。これでいくと、当遺跡の土器は古くみても中期後葉以降といえる。

以上、4種に分けた文様のあり方は阿高Ⅲ式土器の最終段階から南福寺式土器・出水式土器に類似するが、凹線部がヘラケズリ様となる南福寺式土器の特徴はここでは全くみられない。これらの中で注目されるのは文様形態が他の土器に似ていながら、素地調整が表裏とも貝殻条痕で仕上げられている145の土器である。このように貝殻条痕を多用しているのは岩崎上層式土器の特長であり、この土器も岩崎上層式土器・南福寺式土器・出水式土器の文様と同じ特長をもっていることから、これだけは岩崎上層式土器であろう。岩崎上層式土器と指宿式土器の関連がはっきりしないが、こ

の両者が同時期のものとすれば、これは大隅半島からの持ち込みとも考えられる。

また胎土においては、春日式土器・並木式土器以来、中期の土器に多く混入される滑石粉末がほとんど用いられないという特長もある。地域的な違いとも思われるが、当遺跡が西北九州に近い西海岸に位置していることを考慮すれば、この時期には既に用いることがなくなっていると考えられよう。

器種としては深鉢が大多数を占めているが、浅鉢・鉢も少量ある。

以上のことを含めて考えれば、これらの土器は口唇部の深い押圧文、指頭凹線文・押圧文の多用、ヘラケズリの使用、底部付近の縦方向凹線などに阿高Ⅲ式土器・南福寺式土器・出水式土器などの要素を残しているが、凹線幅の狭さ、横凹線の多様など指宿式土器などに近い要素もある。なお、後期に全国的に広がりをもせる磨消縄文土器の影響は、これらの土器には全く見られない。瀬戸内地方で後期初頭に位置づけられる中津式土器は本地方にあまり影響を与えず、その後に出てくる福田Ⅱ式土器は志布志町中原遺跡などで出土し、その影響を受けたのが指宿式土器である。これらの影響を受けた土器はここで出土したなかには全く見られない。したがって、この土器は指宿式土器と重なっておらず、その直前以前に位置づけられよう。詳細は今後の研究にゆだねたいが、年代的には南福寺式土器より新しく、指宿式土器より古い後期初頭頃に位置づけられ、型式名でいえば出水式土器にもっとも近いといえよう。

南九州における出水式土器の位置づけは、出土量の少なさ・出土遺跡の少なさ・他型式との前後関係が不明であることなどもあってはっきりしていない。しかし、熊本県黒橋貝塚での出土状況（西田他：1976）などから考えると、出水式土器はどちらかといえば中九州に主体をもっている型式かもしれない。そうすれば、今回の出土土器の一括性は西海岸における出水式土器の広がりのみでなく組成等で重要な資料といえよう。少なくとも、出水式土器が南福寺式土器と指宿式土器の間にはいることは確実になったといえるのではなかろうか。

参考文献

- 雨宮瑞生「南九州縄文時代草創期土器編年（補遺）」『南九州縄文通信』 NO.11 1997
河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第16号 1972
児玉健一郎「南九州を中心とする隆帯文土器の編年」『鹿児島考古』第33号 1999
新東晃一「塞ノ神式土器再考」『日本民族・文化の生成』永井昌文教授退官記念論文集 1988
田中良之「阿高式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館 1988
田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集 1979
西田道世他『黒橋』（『熊本県文化財調査報告』20）熊本県教育委員会 1976
八幡一郎・賀川光夫「早水台」『大分県文化財調査報告』第3輯 大分県教育委員会 1955